

## 第二話 竜馬誕生秘話(二)

竜馬の母、幸は其の夜妙な夢を見ていました。

それは夜空に巨大な竜が舞い、その後を一頭の馬が追いかけるように走っている光景です。すると突然竜が渦巻くように早く回りだしたかと思うと、幸の寝ている部屋にどどつと飛び込んできたのです。

「ぎゃー」と悲鳴をあげた幸は本能的にお腹に手をやって夢から醒めました。臨月を迎えていたお腹の子は無事でした。

やがて生まれてきた我が子に「竜馬」と名付けたことは良く知られている事ですが、幸がその夜、悪夢を見た原因は一体何だったのでしょうか？それはこれまでの竜馬を語る歴史書には全く触れられていない驚くべき事件があったのです。

近年の「ハレー彗星」は一九八六年に回帰し、私ははるばると南の『天国に一番近い島』と言われるニューカレドニアまで観測に出かけました。ところが、その一つ前の一九〇年（明治四三年）には異常なまでに地球と接近し、「あわや

世界の終わりか」と世界中を震撼させたのでした。こうして七六年毎に接近するハレー彗星の足取りを遡っていく時、私はある事実を発見し唾然としました。なんと竜馬が生まれた一八三五年一月一日、近日点に迫ったハレー彗星は、まるで悪魔の跳梁するが如く、竜馬の町「上町」の上空にその異様な姿を漂わせていたのです。「奔竜天馬の如く活躍せよ!」気丈夫な幸はこのような願いをこめて我が子に「竜馬」と命名したことは想像に難くありませんが、三三歳で他界した竜馬は勿論この名付け親となったハレー彗星を知らないはずです。しかし昭和の初期、桂浜に立てられた竜馬の銅像は一九八六年、初めてハレー彗星の回帰を迎えることとなるのですが、そこに実に奇妙にして微笑ましい事件が待ち受けているのでした。